

ハウエルズの危機意識

——『ありふれた訴訟事件』をめぐる——

大 井 浩 二

W・D・ハウエルズの『ありふれた訴訟事件』(W. D. Howells, *A Modern Instance*, 1882)という小説は、一体どのように読めばいいのだろうか。一方では、いかにもリアリズムの作家らしく、南北戦争後のアメリカが直面した問題を鋭く、ひるみない目でとらえているようでありながら、他方ではまた、ひどく教訓的で、「人生のほほえましい側面」を描くことを強調したといわれる楽観主義者のナマの発言がいたる所から聞こえてくる。きわめて客観的に、一人のアメリカ青年の墮落の姿を追いかけているかと思うと、離婚という話題をめぐる、抽象的かつ道徳的な議論がながながとくり返される。この小説はどこか焦点が絞きれないままに、いろいろの雑多な主題や材料が混然と提示されているような所があって、読者としては奇妙なとまどいを覚えざるを得ないのだ。

こう書いてくると、『ありふれた訴訟事件』は、ハウエルズの作品群のなかで、凡作の扱いを受けているように思われるかもしれない。だが、まことに意外なことに、この作品に対しては、これまでかなり高い評価があたえられてきた。E・H・ケイディは、これを「ハウエルズの第一級の小説」のリストに加えているし、アレグザンダー・カウイーも「ハウエルズの永続的な名声のとりで」を構成する六冊の小説のなかに数えあげている。O・W・フリクステットは、これを「疑いもなくハウエルズの最高の小説の一つ」と呼んで、「これをもって、彼は芸術的達成の最高水

準に到達した」とさえ断言しているし、最近のウィリアム・アレグザンダーなども、その立場を支持する旨の発言をおこなっている⁽⁴⁾。ハウエルズ自身、この小説をみずからの「もっとも偉大な」作品とみなし、「最大の満足」を覚えていると語っていたし、彼の「もっとも強烈な」作品は『ありふれた訴訟事件』であると信じてづけていた、と伝えられている⁽⁵⁾。こうした評価からすると、この小説はアメリカの現実をとらえようとしたリアリスト・ハウエルズのみごとな力作である、と言い切つていいように思われてくる。だが、H・N・スミスにいわせると、『ありふれた訴訟事件』は、部分的には見事であるけれども、結局、「リアリズムにおける彼の（ハウエルズの）冒険は失敗に終わっている」と結論せざるを得ない。この小説におけるハウエルズは、古めかしい文学の伝統と絶縁しようとしながら、「残念なことに、彼は反逆の計画を論理的帰結にまで持ちこむことができなかった」とスミスは語っている。ここでのハウエルズには「社会的リアリスト」と「モラリスト」との葛藤が見られ、「アメリカ生活の現実に向面したハウエルズは、道徳的、知的なディレンマに縛られてしまつて、彼の小説をどう終らせていいのか、一切わからなくなつてしまつた」という発言もなされている⁽⁶⁾。どうやら、この小説は一見思われる以上に複雑で、一筋縄ではとらえきれないようだが、それだけにまた、ハウエルズのかかえていた問題を考えるためには、この上なく都合のいい作品といえるかもしれない。

この作品の題名は、シェイクスピアの『お気に召すまま』から取られているが、ここである「ありふれた訴訟事件」とは一組の夫婦の離婚をめぐるそれにほかならない。当然、物語としては暗い、じめじめした内容とならざるを得ないが、その冒頭においては、舞台はメイン州エクイティ（これが「公平」を意味していることを見落としてはなるまい）という田舎町に設定され、いかにも健康で、明るい幕開きを思わせる。ニューヨークランドの牧歌的な雰囲気、こうして読者にまず紹介され、自然の美しさの描写もハウエルズはふんだんに持ちこんでいる。そこに登場する村のロメオとジュリエットとも呼ぶべき人物は、土地の新聞社で記者として働いているバートリー・ハバードと、や

はり村の有力者で弁護士の父をもったマーシャ・ゲイロードという若い男女である。パトリリーは有能で容貌にも恵まれた青年で、おのれの実力だけを頼りに生きてきたようなタイプの男、つまりアメリカ人一般が理想とする「セルフ・メイド・マン」の典型として描かれている。彼が早くから両親を失っているというのも、彼をアメリカン・アダムの的な「孤児としてのヒーロー」に仕立てあげるのに役立っていると言えるだろう。他方、その恋人としてのマーシャは、美しくてやさしく、まさに無垢そのものといった姿を読者のまえに見せている。父親の強い反対を押し切っても、パトリリーを愛しつづける彼女に、男性の夢をみたしてくれる「可愛い女」のイメージを読みとることは、さほど困難ではあるまい。いずれにせよ、この二組の男女は、ニューヨークのエデン的世界に登場した新しいアダムとイヴと呼んでもいいのではないか。この物語の基本的な設定に関するかぎり、それはアメリカ的パストラルの条件を十二分にそなえていて、たとえば『アルーストウク号の貴婦人』のような作品と同じ展開を期待する読者も多いにちがいない⁽⁹⁾。

だが、物語がすすむにつれて、読者の期待はみごとに裏切られてしまう。牧歌的な風景にみえたエクイティの村を描写するにあたって、ハウエルズはその荒涼とした冬景色の不毛の姿を読者につきつけることを忘れていない。また、宗教的な基盤を失って、かつての共同体としての意味を失いかけた村の、どこかさむざむとしたたゞすまいも見落とすことができない。さらに、マーシャとパトリリーが駆け落ち同然の形で結婚して、舞台がボストンに移ると、都市生活の混沌と腐敗がいや応なしに描きこまればじめる。主人公たちの田舎町から大都会への移住という形で、田園的、牧歌的アメリカから都市的、産業的なアメリカへの変化が明確にとらえられているといえようか。この小説における田園と都市のコントラストは、若い男女をとりまく新しい環境を支配するのが物質主義であって、そこからは人間的な要素が一切排除されていることを物語っているのである。

こうした田舎から都会への変化とともに、パトリリーとマーシャとの関係にも微妙な変化が見えはじめる。マーシ

ヤは一見いかにも女性的であったが、やがてきわめて嫉妬心の強い妻としての側面があらわになってくる。作中のある人物は、彼女を「情熱的で、心がせまく、嫉妬ぶかい」と呼んでいるし、また別の人物にいわせると、「あの人はたしかにこの上なくひたむきな人間にちがいない。ときどき、わたしはあの人の純真さが恐ろしくなってくる」ということになる。マーンシャという女性は、夫を心から愛しながらも、結局は自分本位にしか物を見ることができない。「恐ろしくなる」ほどの「純真さ」をもった彼女には、男性をあたたく抱きかかえて、その欠点をも含めて愛するといった心の広さは期待すべくもない。その「純真さ」のゆえに、夫との離別という結果を招いたとすれば、マーンシャという女性は「無欲なヒロインの救済者的な愛情」⁽⁶⁾の不毛性を証明するような存在であった、といわざるを得ない。『ありふれた訴訟事件』におけるハウエルズは、「無欲なヒロイン」が登場して、「救済者的な愛情」をまきちらしていた『アルーストウク号の貴婦人』のパロディ的作品を書いている、という見方も成り立つのではないか。そこにみられた「文化的愛国主義」⁽⁷⁾は、ここでは完全に影をひそめているといえよう。そこに彼のリアリストぶりを見てとることも不可能ではないのである。

だが、ハウエルズのリアリズム精神という点になると、やはりバートリーという人物に注目しなければならない。彼は才能と野心にあふれたジャーナリストとして、ポストンにやってきてからも、ほどなくして有力な新聞社に職を得ることができる。前途有望な青年と周囲からは見られていながら、その友人に「利己的」というレッテルをはられていることからわかるように、自分の目的のためには手段を選ばない男である。新聞社に自分を売りこむために、旧友があたためていた材料を平気で使って、原稿を書きあげることも躊躇しないし、別の友人から借金しても、それを返すことを思いたらないばかりか、株の売買に費すこともやつのける。妻とのあいだにも、彼の飲酒や女性関係が原因となつて、秋風が立ちはじめ。こうして、アメリカン・アダムのなヒーローとしてのバートリーの「道徳的墮落」を、ハウエルズは執拗に追いかけることになる。「抑制」がすぎつぎととり除かれ、「絶対的な自由」で行

動することを渴望し、マーシャの「家庭というくびき」を嫌悪する彼の姿には、「利己的」で「規律を欠いた」性格がはつきりと読みとれるのである。

こうしたバートリーの「道徳的墮落」をなによりも雄弁に伝えているのは、ビールを愛飲する彼が「滑稽なまでに肥りだした」という事実にはかならず。ハウエルズは、この小説のいたる所で、バートリーの転落のプロセスとともに、彼が肥満化しはじめたということをくり返し書きとめている。最初に「彼の肥満の目に見える傾向」が明らかになったときから、それは彼の飲酒癖、怠惰癖と結びつけられていて、「ぜい肉の増大とともに、バートリーはますます安楽を好むようになった」とも説明されている。たまたま久し振りに彼と出会った元の同僚は、その後姿を見送るながら、一種の「不安感」におそわれ、それを「墮落した人間の後姿」と思う場面も用意されている。「その肥大する背中は、健全な肉体の増大ではなく、なんらかの道徳的な乾燥腐敗に重大なかわりをもつコルク質の、浮薄な組織を表わしているように思われた」という評言は、バートリーの本質を見事に言い当てているのだ。彼の外面的な変貌がそのまま彼の内面的な変質につながっているだけでなく、肉体の肥大化が精神の弱体化を表わしているというアイロニカルな指摘には、ハウエルズの鋭い現実感覚がうかがわれるといつてよいだろう。

こうして、マーシャとバートリーは、一見いかにも幸福そうな生活を送っているが、その関係は精神的にすっかり冷きってしまったて、ついには離婚という事態を迎えることになってしまう。この離婚という問題は、フロンティアの消滅した一八九〇年ごろから急激に増加しはじめた現象であったが、これをいち早く話題として取りあげたことは、ハウエルズのジャーナリスティックな感覚の鋭さを示している。と同時に、この家庭の崩壊は、ただ単に現象的に重要であるだけでなかった。それは根本においては、古いアメリカの価値の崩壊、アメリカはつねに美徳の支配する例外的な世界であるという信念の崩壊と結びつけることも可能である。しばしば指摘されるように、アメリカ社会においては、家庭は退廃した周囲から隔離された世界であり、そこでは墮落した外界とは無関係な純粋さと完全さが

確保されている、と考えられていた。ハウエルズは離婚というテーマを持ちこむことによって、南北戦争以後のアメリカ社会に生じたひずみに光を当てているといつてよいだろう。『ありふれた訴訟事件』における「離婚という主題」は「アメリカ社会において幅を広げている文化的な分裂を描くための手段」であつて、そこには「文化の離婚」が描かれているといつてもいい、という評言⁹⁾は、まことに適切であると考えられる。新しいアダムとイヴの「離婚」を扱ったこの小説を、「アンチパストラルの一種」と呼ぶ批評家がいるとしても不思議はないだろう¹⁰⁾。

このように考えてくると、『ありふれた訴訟事件』は、きわめてリアスティックな目で、例外としてのアメリカという神話を打ち破ろうとしたハウエルズの代表的野心作ではないか、といったくなつてくる。そこにはバートリーとマーシャという一組の男女の生活と意見とおして、アメリカ文化に内在する混沌と矛盾が抉出されている、と結論できそうだが、そう言い切ることができないところに、じつはこの小説の重大な問題点がひそんでいるのである。というのも、この小説は三分の二をすぎるあたりから、にわかに調子がおかしくなりはじめる。それまで舞台の中央を占めていたバートリーがそそくさと退場させられてしまつて、それまで端役をあたえられていた弁護士ユースタス・アサートンと、一種の高等遊民ともいふべきベン・ハレックの二人が新しい主役として活躍しはじめる。極端な言い方をすれば、『ありふれた訴訟事件』は前半と後半とに完全に分裂してしまつて、まったくちがう二つの物語を構成しているといった印象さえあたえかねない。この内的分裂ぶりは、はたしてなにを意味しているのだろうか。一体、リアリスト・ハウエルズになにが起つたのだろうか。

すでに触れたように、バートリーという人物は、ハウエルズのリアリズムの勝利にほかならなかつた。いささか鼻につく、自己中心的な人間にはちがいないが、戦後のアメリカを象徴する新しいタイプのアメリカ人像がそこに刻みこまれていることは否定できないだろう。この人物に強烈な実在感がそなわっていることは、連載途中の『ありふれた訴訟事件』に感激したマーク・トウェインが、親友ハウエルズに書き送った手紙のなかで、「バートリーはぼくを

描こうとしたのではないだろうが、それでもやはり、あの男はまぎに、ぼくそのものだよ」という感想を述べているところからうかがわれる。いや、ハウエルズ自身、この小説の出版後三十年もたってから書いた手紙のなかで、「昨日、『ありふれた訴訟事件』の大部分を読みました、あの不誠実な悪党のバートリー・ハバードはわたしをモデルに描いたことがわかりました」と書いていた⁹⁹。そこに「バートリーはわたしだ」というフロベール流の主張を聞きつけることは困難ではあるまい。にもかかわらず、このみずからの分身ともいふべき人物を、ハウエルズはいともやすやすと画面の外に追放してしまふ。マーシャとの夫婦喧嘩のあと、腹立ちまぎれに汽車にとび乗ったバートリーは、クリーヴランドまで行ってから、ボストンに引き返そうとするが、そのときすでに有り金のすべてをスリ取られてしまっている。「彼には、みずから選びとった破滅以外に、なにも残っていないかった」という言葉で、第三十一章は終わり、このあと彼は結末近くまで姿を消してしまふことになる。こうしたハウエルズの処置に対して、これはけつして「みずから選びとった破滅」などではなく、「ハウエルズがバートリーのために選びとった結末」である、といった意見や、「著者はわざと彼を押しやっている」といった評言¹⁰⁰も聞かれる。バートリーの追放劇には、小説の論理が要求しない不自然さがつきまとっているといわざるを得ない。

しかも、その不自然さは、バートリーに代わって、弁護士アサートンが重要な役割を演じるようになる第三十二章以降の展開とともに、ますますつのつてくる。この人物はボストンの富裕な皮革商人エズラ・ハレックの息子ベン¹⁰¹の年長の友人であり、バートリーの妻マーシャを熱愛するベンにさまざまな忠告を試みたり、夫が蒸発したあとの彼女の面倒を見たりすることになる。この小説に最初に姿を現わした当座の彼は、さほど重要な位置を占めているようにも思われず、マーシャの性格や特徴を客観的にベンや読者に説明する役目をはたしているにすぎなかった。ところが、物語が後半にはいつて、バートリーが姿をくらます第三十一章以降になると、にわかに教訓的な発言をくり返す、きわめて道徳的な人物として、たえず読者のまえに姿をあらわすことになる。バートリーが利己的で、いささか破廉恥

な悪徳漢として、読者の注目を惹きつけた存在であっただけに、その後釜に坐ったアサートンの猛烈な道学者ぶりは、きわ立った印象をあたえずにはおかぬのだ。

この弁護士は、たとえば、二年ぶりに南アメリカからベンが帰ってきたとき、彼がまだマーシャを思いきれないでいるのを非難するばかりか、彼を「女性を誘惑して義務から遠ざけ、名誉を破滅させ、社会を崩壊させる悪者の一人」に数えあげるような発言をしている。あるいはまた彼は、妻のクララとの会話のなかで、バートリー夫妻のような「規律を欠いた人間」を「自然人」と呼んで批判し、「自然人は野獣であり、その生来の善良さは、満腹のときに日なたぼっこをしている獣の愛想のよさである」と語っている。さらに彼は、人間にとって重要なのは「植えつけられた善良さ——世代から世代へと大事に受け継がれた正直さの種子」であって、「この植えつけられた善良さという花がわれわれの文明と呼ぶものである」とも述べている。かと思ふと、「われわれはみんな一つに縛られている。文明の状態においては、一人の人間は一人だけで罪をおかしたり苦しんだりするのではない。……キリスト教社会においては、われわれは一緒に向上したり下降したりするのだ」という主張をしたりもする。どうやら、彼の基本的な哲学は「わたしは秩序に反するものは一切これを憎む」という言葉に要約できるのである。

当然、読者としては、このような道徳臭の強い人物をハウエルズが登場させた理由はなにか、と問いたくなるのだが、この点については、すでに批評家たちの答えが出そろっている。『ありふれた訴訟事件』にはハウエルズにおける「社会的リアリスト」と「モラリスト」の葛藤があらわれている、と主張する論者がいることはすでに触れたが、同じ論者によると、「社会的リアリスト」ハウエルズはバートリー夫妻の離婚という形で、アメリカの現実に迫っているが、そこに発見した「文化の離婚」という現象にショックをおぼえ、「代弁者」アサートンの姿を借りた「モラリスト」ハウエルズが小説のなかにはいりこみ、「道徳的秩序」を実現しようとしたのである。R・H・ブロックヘッドは、「道徳的不安の状態」にさらされるという「緊張」に耐え切れなくなったハウエルズが「道徳的審判

者」としてのアサートンを正面に引き出すことによって、「彼と彼の小説を崩壊に導いた権威の危機に小説的な解決をあたえようとしている」と述べている。H・N・スミスが指摘しているように、文明と進歩への信念という「十九世紀のスタンダードなアメリカ的イデオロギー」がハウエルズの「認識のカテゴリー」になっていたとすれば、アサートンは、バートリーのような新しいタイプのアメリカ人の出現によって危機にさらされた「アメリカ的イデオロギー」を再認識するための手段であったといえるだろう⁹⁹。あるいは、純粹で完全なアメリカというパラダイムをもちつづけていたハウエルズにとって、アメリカ社会に出現した「不誠実な悪党」バートリーは、その不変のパラダイムをおびやかす恐るべき破壊分子に思われ、この危機意識のゆえに、彼はアサートンを強引に重要なポストにつけることになった、と考えることもできるのではないか。

だが、アサートンをハウエルズの「スポークスマン」と同一視する多くの批評家の見解は、はたして当を得ているのだろうか。たしかに、この見解に異議を唱える研究家がいけないわけではない。E・H・ケイディはアサートンが「ハウエルズの道徳的スポークスマン」であるという見方を否定して、小説の結末におけるこの人物の「ああ、わからない！」という言葉には「不可知論的疑念」が表われていると語っていた。このハウエルズ学者はまた、ごく最近の文章でも、「アサートンは、この小説のなかで、けっしてハウエルズを代弁していない」と書き、この人物の「きびしい裁定」が「すばらしい環境、完全な食べもの」といった「愛と運と富が贈りうる最高のもの」のなかでなされているという事実のなかに「ドラマチック・アイロニー」を発見している。ケネス・リンもまた、弁護士を「ヒステリックなまでに勿体ぶった」人物と評し、「ハウエルズはアサートンの立場の非人間性を、すくなくとも時たまには意識していた」と指摘している。だが、弁護士の「道徳的権威」に反抗できるのは、妻のクララだけであることから考えて（彼女は、「わたしたちには、欲しいものがすべてあるのよ」と語っていた）、「結局のところ、ハウエルズはアサートンと真剣に争っていない」というのが、リンの結論であった¹⁰⁰。はたして、ハウエルズは「真剣」にアサートン

批判をしていないのだろうか。この問題を考えるためには、第三の男ベン・ハレックの存在に注目しなければならない。

一体、ベンとは何者なのか。彼はバートリーの大学時代の友人で、ボストンで再会した二人のあいだに交際がはじまるが、ベンは結婚まえのマーシャを見かけて恋心をもやしたことがあったため、ハバード夫人として彼のまえに姿をあらわした彼女に、ふたたび強い愛情をいだく。やがて、彼はバートリーに多額の金を貸したり、酔っ払ったバートリーをマーシャのもとに送りとどけたりする羽目になってしまふ。バートリーの失踪後、人妻への恋に耐え切れなくなった彼は、南アメリカへボランティアの教師として赴任したりするが、ついに彼女のことを思い切れない。この人物も、アサートンと同じく、小説の前半部では、かなり影のうすい存在であったが、しだいに重要な位置を占めるにいたり、ついには、バートリーのあとをうけて、アサートンと主役の位置を争うようにさえるのだ。

ベンは最初に登場したときから、バートリーとは対照的な人物という印象をあたえていた。いかにも開放的で外向的なバートリーに対して、瞑想的で内向的なベンという設定は、はじめから明白であった。アサートンにいわせると、バートリーが「自然人」で「野獣」であるとすれば、「植えつけられた善良さ」をもち、「文明」を代表する人間はベンということになる。ベン自身、何回となくバートリー批判を試みていて、その浅薄さ、軽薄さに言及しながら、「野球のボールほどにも道徳性をもっていない男」「これまで知っているもっとも利己的な男」という評価を下していた。逆に、バートリーが妻にむかって、「ベン・ハレックはお前が結婚すべきであったタイプの男だぜ」と語っているところから察しても、二人が本質的に異った性格の持主であった、と言い切ることができる。

だが、同時にまた、この二人のあいだには意外に類似した点がないわけでもないのだ¹⁰⁰。たとえば、二人のイニシャルはいずれもB・H・と同じであったし、同じ大学に通っていたことは勿論、マーシャという同じ女性を愛してい

たことも、二人の共通性を裏書きしていると言わねばなるまい。とくに、イニシャルの一致は、あとで郵便物の誤配という物語の展開にかかわる重要な場面と切りはなせないので、ハウエルズが意図したものにちがいない。あるいはまた、ベンがハーバードで弁護士になるための勉強をしていたと同じように、バートリーもこの職業に興味をもち、マーシャの父親で弁護士のゲイロード氏から法律書を借り出して、それに読みふけただけでなく、その父親のもとで法律の勉強をしてもいい、と述べたりしていたことも見落としてはなるまい。ベンが酔っ払ったバートリーを自宅まで送りとどけたとき、「彼の影は酔っ払いの姿のように舗道の上で揺れた」とハウエルズは書いているが、この「酔っ払い」のイメージに二人の男性の類縁が暗示されているとも言えるのではないか。「ベン・ハレックとバートリー・ハーバードは一緒になっている。ハウエルズは一方ぬきで他方を考えることができなかった」⁽⁴⁾という評言をここで思い出してもいい。

こう見てくると、ベンとバートリーは、精神的な双生児といってもよいほどに似通っていることが判明する。二人の相異点のいくつかは、むしろその類似点を強める働きをしているともいえよう。いつそ、ベンをバートリーの分身とみなすならば、第三十一章までのバートリーと、それ以降のベンとがまったく異った物語を構成している、などと考えなくてもすむのではないか。バートリーを西部へ追いやったあと、ハウエルズはその分身としてのベンを登場させ、バートリーの物語を、ちがった角度から展開、継続させることになった、という仮定も、二人の双生児性に目をとめることで可能になってくると考えたい。バートリーの物語からベンのも物語へと一貫して流れる主題を見つけることができれば、アサートンの道学者ぶりに別の解釈を加えることができるかもしれないのだ。

あらためて書き立てるまでもなく、ベンは弁護士アサートンの友人であったというだけでなく、アサートンによって理想的な人物、「植えつけられた善良さ」を代表する人物とみなされていた。「利己的」で「規律を欠いた」バートリーやマーシャとは対照的に、ベンは「善の理想」であり、「無私と他者に対する責任との高貴な理想」にほかな

らなかった。弁護士のように、「植えつけられた善良さ」という「花」が「文明」ならば、ベンはまさに「文明」を代表する人間でなければならなかった。この人物こそは、アサートンの希求する「秩序」を象徴する「純粋な修養と伝統の人間」であった。ベンのような男が誘惑に負けたり、マーシャと強引に結婚するようなことがあれば、それは「なんとという打撃だろうか」とアサートンは語っているが、こうした発言からも、ベンが道学者アサートンに對してもっている意味が明らかになってくるだろう。

にもかかわらず、その理想の人物は、アサートンの期待に反する行動をとりつづける。マーシャがいかに「貧弱で、未熟で、衝動的で、無知な女」であるかをアサートンが説き聞かしても、その言葉にベンは耳を傾けようとしていない。二人のあいだには、なんの意見の一致もないばかりか、ベンの発言はアサートンを当惑させるばかりなのだ。マーシャとの結婚を願う彼は、パトリークの死さえも願いはじめ、それに対して冷たい態度をとるアサートンに向って、「だれかにぼくの邪悪な性質を納得させることができればいいのに」と叫びだす始末なのだ。ベンはまだ、「人間の心から、聖書に挙げられている不快なことのすべてが流れ出てくる」と語り、「人間の性格は迷信、みじめな盲信の対象だ」などとも口ばしする。「罪人」は、「社会のまえで自分を裏返しにして、いかに地獄の煙がすこしずつ内部を黒くさせているかを人々に見せる。そうすることで、崇拜の対象としての性格を否定するのだ」とも語っている。道徳的な言葉をくり返すばかりのアサートンにむかって、「きみはじつに雄弁だが、そういう抽象的な議論はぼくの興味をかき立てないということを、きみにわかってもらいたい」とベンがいうとき、彼はアサートンのモラルズムとまったく無縁の人間であることを明らかにしているのである。結末におけるアサートンの「ああ、わからない!」という言葉は、こうしたコンテクストのなかで、はじめて正しく理解できるのではあるまいか。

こうした読み方をしてみると、『ありふれた訴訟事件』の最後の三分の一の部分で、ハウエルズがアサートンという「スポークスマン」の口をかりて、彼のナマの声をひびかせているという見方は、まったく成り立たないことにな

ってくる。アサートンにまことしやかな説教をさせながら、その説教のむなしさ、無意味さを、もう一人の重要人物ベンの口を借りて、徹底的に批判、否定しているハウエルズの姿が浮かびあがってくる。「ハレックに関するもつともきわ立った事実、彼がアサートンと組んで、この小説のなかを動きまわり、主として彼と議論する場面に姿をあらわしては、主として彼の声への対抗^{カウンター}として機能していることである」⁽⁴⁾というブロックヘッドの指摘を、ここで引用しておきたい。アサートンのヒステリックな声とは別に、ベンの人間的な苦悩にあふれた声もまた、それを打ち消す形で、やはり基調底音として流れていることを忘れてはならないのだ。その点にこそ、バートリーとベンの双生児の性格がもつとも強くあらわれているといえるのではないか。アサートンがバートリーに対立する人物であったとすれば、そのアサートンに対立するベンという人物は、その基本的な姿勢において、バートリーと背中合わせの存在であると考えなければなるまい。

ここで興味ぶかいのは、ベンの創造にあたって、ハウエルズはホーソンの影響を受けている、というブロックヘッドの指摘である。ベンはたしかに、人妻を愛するというひそかな罪に悩む点で、ホーソンのであるといえよう。彼が小説のおわり近くで牧師になろうとするのは、ディムズデル牧師との類縁を暗示しているように思われる。マーシヤの娘フレイヴィアが「ハレックさんって、誰なの?」としつこくきく場面は、パールがヘスターにディムズデルに関する質問をくり返す場面を思い出させる。こうした実例を列挙したあと、ブロックヘッドは「ハウエルズをもつとも深くつき動かすホーソンは、疑念の巨匠としてのホーソンである」と述べ、アサートンの権威を疑い、はねつけるベンの性格にホーソンの人物との共通性を読みとっている⁽⁵⁾。だが、ホーソンは「疑念の巨匠」であると同時に、「ロマンスの巨匠」であったことも忘れてはなるまい。アサートンとベンを中心とする部分について、「メロドラマ」的であるという非難がなされているが⁽⁶⁾、ハウエルズが敢えて非リアリズム的で、抽象的な議論に終始する後半の物語を書きあげたのは、彼がロマンス作家ホーソンの影響のもとで仕事をしていたことを物語っているのではない

か。『ありふれた訴訟事件』の第三十一章以降において姿をあらわしているのは、しばしば指摘されているような「モラリスト」ハウエルズではなく、「ロマンス作家」ハウエルズであった、と主張したい。「メロドラマ」が道徳をめぐるアサートンとベンのやりとりのような材料を扱うのにもっとも適した形式であることは、早くからリチャード・チェイスが明らかにしているのではなかったか¹⁰⁰。

このようにして、『ありふれた訴訟事件』は、リアリズムを主体とする「ノヴェル」部分とメロドラマを特徴とする「ロマンス」部分とに、完全に二分することになる。その意味では、まことに不細工で、一貫性を欠いた、寄せ集めのな作品になり果てているといわざるを得ない。だが、この二つの一見異質な部分は、バートリーとベンという二人のシャム双生児的人物の存在によって、ぴったりと離れがたく結びつけられているように思われる。バートリーの生活をめぐる「ノヴェル」部分で「道徳的墮落」の実態を描くにせよ、ベンの意見をめぐる「ロマンス」部分で「道徳的秩序」の不毛性を描くにせよ、ハウエルズはつねにアメリカを例外とみなす楽観的なパラダイム、H・N・スミスのいわゆる「アメリカ的イデオロギー」の崩壊の姿に目をやっていると断言し切つてよい。そこには、十九世紀末のアメリカ社会のゆくえに対する彼の危機意識が反映しているのである。

『ありふれた訴訟事件』は、けっしてまとまった、一級の小説作品ではない。むしろ、試行錯誤をくり返すばかりの、まことに奇妙な失敗作というべきかもしれない。だが、これが「リアリスト」から「ロマンス作家」に変身してまでも、アメリカの現実をねじふせようとするハウエルズの力業を示す小説であることはひとめていい。そこにアメリカン・リアリズムの先駆者の栄光と悲慘を読みとることもできるのではないだろうか。

註

- (二) E. H. Cady, *The Realist at War: The Mature Years of William Dean Howells* (Syracuse U.P., 1958), p. 269; Alexander Cowie, *The Rise of the American Novel* (American Book Co., 1951), p. 690; O. W. Fryckstedt, *In*

- ⑤ *Quest of America: A Study of Howells' Early Development as a Novelist* ((1958), Russell & Russell, 1971), p. 226, p. 9; William Alexander, *William Dean Howells: The Realist as Humanist* (Burt Franklin, 1981), p. 2.
- ⑥ Fryckstedt, p. 226; G. N. Bennett, *William Dean Howells: The Development of a Novelist* (U. of Oklahoma P., 1959), p. 113.
- ⑦ H. N. Smith, *Democracy and the Novel: Popular Resistance to Classic American Writers* (Oxford U. P., 1978), p. 79; P. A. Eschholz, "Howells' *A Modern Instance*: A Realist's Moralistic Vision of America," in Eschholz, ed., *Critics on William Dean Howells* (U. of Miami P., 1975), p. 71.
- ⑧ 邦語「クハヤミズメ」語のそと——「トナーズ・エドモンドの真像」をめぐって」『國語トナーズ研究』十七号（一九七二）四十―四）参照。
- ⑨ P. J. Eakin, *The New England Girl: Cultural Ideals in Hawthorne, Stowe, Howells and James* (U. of Georgia P., 1976), pp. 107-8.
- ⑩ Fryckstedt, p. 155.
- ⑪ Eschholz, p. 72.
- ⑫ Kermit Vanderbilt, *The Achievement of William Dean Howells: A Reinterpretation* (Princeton U. P., 1968), pp. 49-95.
- ⑬ Frederick Anderson et al., eds., *Selected Mark-Twain-Howells Letters* (Atheneum, 1968), p. 197; Fryckstedt, pp. 244-45.
- ⑭ Eschholz, p. 78; Fryckstedt, p. 245.
- ⑮ Eschholz, p. 77; R. H. Brockhead, "Hawthorne among the Realists: The Case of Howells," in E. J. Sundquist, ed., *American Realism: New Essays* (Johns Hopkins U. P., 1982), p. 36; Smith, p. 77.
- ⑯ Cady, *The Road to Realism: The Early Years of William Dean Howells* (Syracuse U. P., 1956), pp. 213-14; Cady, Introduction to *A Modern Instance* (Penguin Books, 1984), pp. xxi-xxii; Kenneth Lynn, *William Dean Howells: An American Life* (Harcourt Brace Jovanovich, 1971), p. 254, pp. 265-66.
- ⑰ Smith, pp. 95-96; Eakin, p. 111; Alfred Habegger, *Gender, Fantasy, and Realism in American Literature* (Colum-

- bia U. P., 1982), pp. 95-96.
- (iv) Habegger, p. 95.
- (v) Brockhead, p. 34.
- (vi) Brockhead, p. 34, p. 39.
- (vii) Smith, p. 98.
- (viii) Richard Chase, *The American Novel and its Tradition* (Doubleday, 1957), pp. 37-41.